

一般社団法人日本沖縄政策研究フォーラム

日本精神ここにあり！ 沖縄県祖国復帰秘史

第1回：屋良朝苗編

「日本人としての教育を施したい！」
屋良朝苗、祖国復帰の原点

平成31年 **1月29**日(火) 昼の部14:00～ 夜の部18:30～

◎場所：IKE・Biz としま産業振興プラザ 3F 男女平等推進センター 研修室2
(旧勤労福祉会館) ◎会場分担金＋資料代＝1,500円

一般社団法人日本沖縄政策研究フォーラム
理事長 仲村覚



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/2/21



屋良朝苗像

初代沖縄県知事
初代沖縄県議会議長



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村寛
2019/2/21

屋良 朝苗

(やら ちょうびょう)

Wikipediaより



屋良 朝苗（やら ちょうびょう、1902年12月13日 - 1997年2月14日）は、琉球政府および沖縄県の政治家、教育者。1968年11月より唯一の公選行政主席として沖縄の日本復帰までその職にあり、復帰後は沖縄県知事を2期務めた。

■経歴

1902年（明治35年）12月13日に沖縄県中頭郡読谷村字瀬名波に生まれる。1930年（昭和5年）に広島高等師範学校（現在の広島大学）を卒業する。その後沖縄県立女子師範学校、沖縄県立第一高等女学校、台北第一師範学校、州立台南二中などで教職を勤めた。

沖縄戦後、沖縄群島政府文教部長、沖縄教職員会長などを歴任の後、1968年の行政主席選挙では革新共同候補として立候補し、保守系の西銘順治との選挙になったが、本土への早期復帰を訴えた屋良が当選し第5代行政主席に就任する。なお、この選挙では、西銘の当選のために日米両政府が裏で動いていたことが、2010年12月に公開された外交文書により判明しているが、裏工作を撥ね退けての当選だった。

行政主席在任中は、復帰を円滑に進めるために日米両政府の折衝などを進めていったが、その道のりは険しく、苦渋に満ちた表情をすることが多くなり、いつしか「縦しわの屋良」と呼ばれるようになった。復帰後の1972年沖縄県知事選挙で再選。1976年（昭和51年）まで、沖縄県知事として在任した。沖縄返還式典で、一部県民や活動家の反対を押し切り、天皇陛下万歳を三唱した事は一部で物議をかもした。同年の選挙にも出馬を要請されたが、本人は固辞し退任した。

知事在任中の1975年7月17日に沖縄県糸満市で皇族に対する火炎瓶によるテロ事件（ひめゆりの塔事件）が発生したが、事前に警備当局が危惧する中、「警察は火炎瓶が飛ぶなどと言っておりますが、そんなことは絶対にありません」と警備削減させていたばかりでなく、反天皇制・反日沖縄解放活動家が潜伏していた地下壕内を、皇太子および同妃の訪問に先立ち安全確認を主張した警備陣に対しても、「『聖域』に土足で入るのは県民感情を逆なでする」として実施をさせなかった（後、現地で取材をしていた沖縄タイムス記者が、TBSの番組内において「怪しい男がいたので注目していました」と発言しているように事前確認をしていれば未然に防げた可能性が高かった）などが警備担当者から明らかにされている。

知事を退いた後も、沖縄の伝統的な保革対立の中で、革新陣営のシンボリック的存在として革新共闘会議を主導し、後継の知事候補として平良幸市を応援するなどした。

会談等においても自らメモを取るなどしたという。そのメモや日誌は死後読谷村に寄贈され、その複製が沖縄県公文書館にて順次公開されている。

1997年2月14日に、自宅から搬送先である那覇市の沖縄赤十字病院で心不全で死去した。

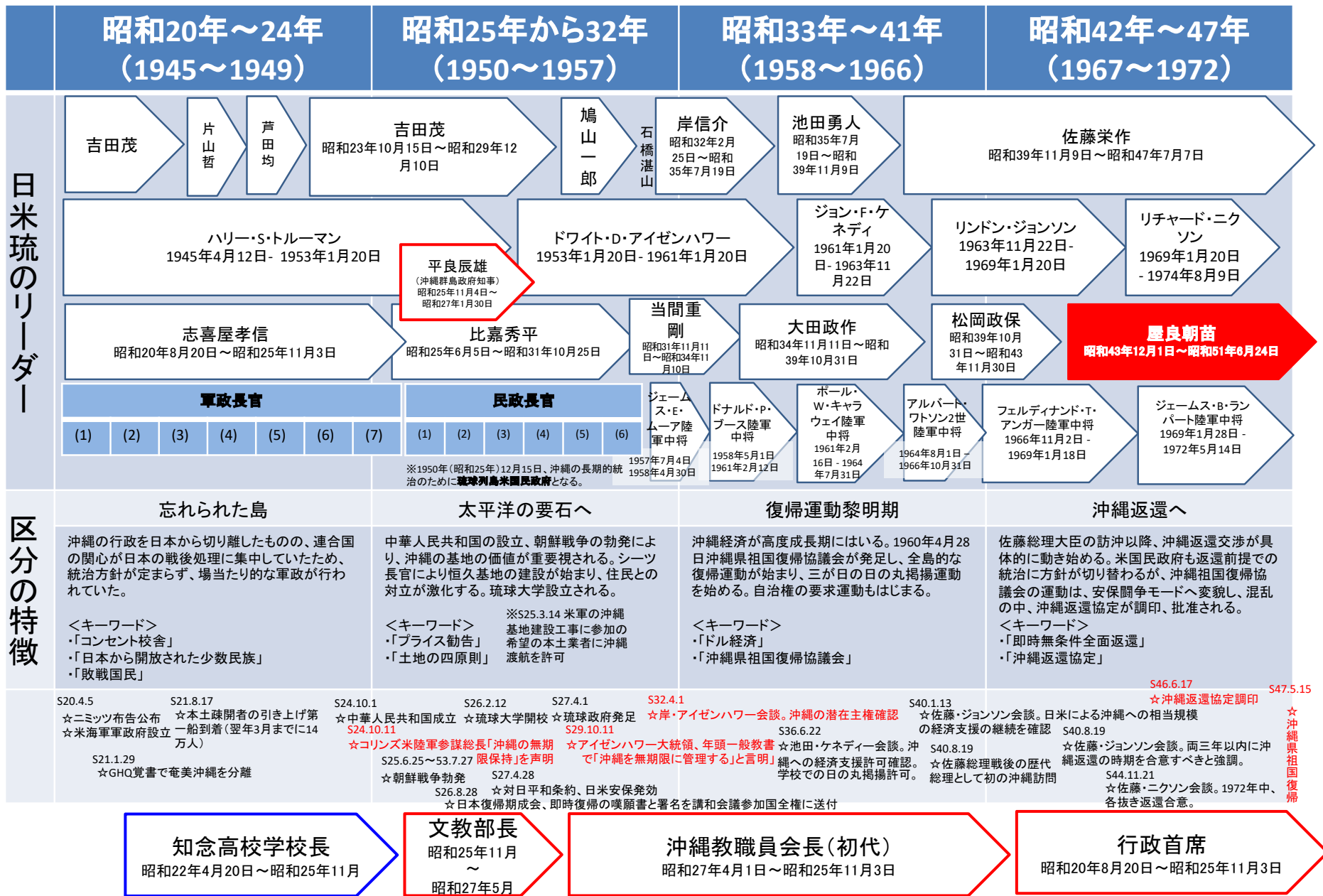
生年月日	明治35年12月13日
出生地	沖縄県中頭郡読谷村
没年月日	平成9年2月14日（94歳没）
死没地	沖縄県那覇市
出身校	広島高等師範学校 （現広島大学）
所属政党	（沖縄社会大衆党→） 無所属



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/2/21



沖縄群島政府文教部長時代

沖縄群島議会議事録
昭和26年（1951年）4月28日

◎宮城久栄君 第十八条四号に日常生活に必要な国語とありますが、小さいことですが講和会議後、万一米国の信託統治になった場合の国語は何をさすのですか。英語か、日本語か。
○文教部長（屋良朝苗君） 現在の言葉を指しているつもりであります。吾々の標準語をさしております。吾々の今標準語と言っているもの。日本語をさしているのです。○宮城久栄君 帰属がどう決っても何時までも日本語を国語としますか。
○文教部長（屋良朝苗君） 帰属如何にかかわらず、私はそう思っております。この言葉を通して沖縄の文化建設をしていくのが妥当と思います。

文教審議委員会
昭和26年（1951年）9月18日

信託統治の沖縄の教育について要望事項

1. 教育の制度、行政、内容共に日本に順次日本の教育法規を採用すること。
2. 教員養成機関、免許法も日本に準じ戦前のように自由に教員の交流もできるようにする。
3. 進学希望者の取扱も戦前と同様にし自由に道を開き、外国人取扱をしないこと。卒業後も自由に留まり就職も日本人同様にできるようにする。
4. 文部省の教育文化の諸事業については、琉球も一府県に準じ、参加できるようにすると共に文部省の教育研究資料も各県同様配布してもらうこと。
5. 教育の視察指導助言のためにアメリカの教育専門家を随時派遣してもらいたい。
6. 戦災教育施設の復興を日本の方でも援助してもらいたい。
7. 教育施設の充実に援助してもらうこと。
8. 教育刊行物の充実に援助してもらうこと。
9. 教育刊行物の発刊を自由にする。
10. 米留学、視察の援助。

第3回校長会での挨拶（抜粋）
昭和27年（1952年）1月19日

平和会議及び其の他の機会に明らかにされたことは我等の主権は日本に残存し、やがて国際社会が安定すれば我等の願望はかなえられて祖国日本に復帰する日ことができるということでもあります。この事は我々にいろいろな示唆を与えるもので、我々の教育方針も教育的施策も日本復帰を前提として考えられねばならないということになります。沖縄の現在は一時的な仮の相であって天意天道に即する安定永遠の相は近い将来我々の前に現れるのであります。一方、我々の教育は一時的目的なものではなく、将来につながるもの故に必ず将来からの既成を受けねばなりません。しかして我々の若い世代に日本人的資質個性を十分に発揮せしめつつ世界文化へ貢献し得るよう、教育を進め杭を千歳に残さないようにしなければならないと信じるのであります。ここに私は教育者の不退転の決意と信念を要請するものであります。



終戦直後の茅葺き校舎と授業風景



台風で倒壊したのを継ぎ接ぎ支柱で支える。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

沖縄教職員会長時代①:国旗掲揚運動

「国旗掲揚についての請願書」昭和27年5月7日



沖縄教職員会長時代②: 沖縄戦災復興支援の全国行脚

沖縄は、戦争で県土のほとんどが焦土と化し教育施設が壊滅したため、終戦直後は、馬小屋や青空教室のような環境で教育を再開しました。その後、米軍のコンセット兵舎（かまぼこ隊舎）を仮施設として利用するようになってきましたが、琉球政府の予算は不十分で、正式な校舎、必要な教室を用意するには、相当な年月がかかる見込みでした。

そのような中、昭和27年（1952年）12月屋良朝苗氏を会長として「沖縄戦災校舎復興期成会」が結成され、翌年1月20日に、戦災校舎の復興支援を全国に訴えるために、屋良朝苗、喜屋武真栄、他3名を本土に送りました。

屋良氏が沖縄に戻ったのは6月23日で、その間の約半年間、全国各地を行脚して、戦災校舎復興のための支援を訴えたのでした。

屋良朝苗氏は、戦災校舎の復興支援を訴えたるはずの場で、沖縄の祖国復帰を訴えたのです。その演説内容は、まさに歴史に残る名演説でした。1950年（昭和25年）11月、琉球政府文教部長に就任した屋良朝苗氏は、教育行政の第一課題を「校舎の復興」と決意し、第二に教職員の生活保障、第三に教職員の確保と質の向上と考えました。

当時の教育環境は惨憺たるもので、9割以上が戦争で壊滅し、テントや草ぶき校舎がほとんどで、台風がくるたびに飛ばされていました。そのような中、屋良朝苗氏は、文教部長就任直前に全国の教育指導者講習会に沖縄代表の10人の中の一人として3ヶ月間講習を受け、本土の教育の実情を知る機会がありました。当時の沖縄では教員も児童、生徒もみんな米軍払い下げの軍服を仕立て直して来ていましたが、本土の子どもたちはランドセルを背負い、華美な服装をし、校舎も立派なものが立ち始めている様子を直に目にし、あまりの格差に愕然としたのです。それが、屋良氏が文教部長就任時に校舎の復興を第一課題にかかげた理由です。その頃、米軍民政府が沖縄本島南部の11市町村を巡視し、今一番復興してもらいたいのは何かと聞いたところ、全町村が異口同音に校舎の復興と答えました。沖縄のリーダーは教育こそ、沖縄復興の柱だと考えていたのです。しかし、施政権者の米軍は教育を第一義とは考えていませんでした。「沖縄は自給自足できる経済体制の確立が第一義で、それができたらその余力で教育を行えば良い」という考えてした。

では、日本政府が支援すれば良いと思われる方も多いと思いますが、米国は当時、軍政下の沖縄に日本政府が校舎建設を援助するというのは内政干渉だという見方を示し、沖縄に日本の資金で形を残るものをつくるのを極度に嫌っていたのです。1995年（昭和30年）6月、本土の募金は6300万円に達していましたが、米民政府は普通教室や図書館などの建設を許さなかったため、図書、ピアノ、オルガン、跳び箱など様々な品目42000点が「愛の教具」として、各学校に送られたのです。



戦災校舎の実情を訴える屋良朝苗



本土から送られた楽器（愛の教具）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/2/21

沖縄教職員会長時代③: 教育基本法(日本国民としての教育)

<布令66号「琉球教育法」>
昭和27年2月28日

日本政府 教育基本法(昭和22年法律第二十五号)

前文

われらは、さきに、**日本国憲法**を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。

われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

ここに、**日本国憲法の精神**に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。

<教育基本法立法要請参考案>
「われら日本国民として、..」

昭和31年1月

文教社会委員会で全会一致で可決。

立法委員会本会議で可決

×比嘉首席、米民政府の圧力により署名せず廃案

昭和31年10月24日

再びほぼ同じ内容で提出

×行政首席の同じような処置によって廃案

<布令165号「教育法」>
昭和32年3月2日(即日実施)

↓
教育の現場に混乱

昭和32年9月21日

三たび、立法院議員本会議に提出

1月7日、行政主席の署名の期限最後の日になって、パーツ情報局長から会いたいとの連絡があり、那覇市内のレストランに出かけていった。局長は、「教育四法を認めたらどうなるか」と聞いた。私は「アメリカにも沖縄にもプラスになる。長い間の望みが叶えられて、教職員も住民も落ち着く。認めないと、私は全組織を上げて抵抗する。」と答えた。その日の夕方、高等弁務官の承認が下りた。比嘉首席のあとを付いた当真重剛首席が署名し、教育四法は1月10日に公布された。私の今日までの運動の中で、この時が首席当選の際にもまして、いままってもっともうれいできごとである。(屋良朝苗回顧録 56ページ)

◎モーア高等弁務官の承認が下り、当間首席が署名、10日公布

琉球政府 教育基本法(昭和33年1月10日公布)

前文

われらは、**日本国民として**人類普遍の原理に基づき、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しなければならない。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。

われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。

ここに、**以上の理念に則り**、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。

「日本国民として」くだりに、私たちは大きなねらいを込めていた。大衆のどこをい押しても「復帰したい」という同じ音色が出ることだ。そうでないと相手側に「復帰は扇動者の言だ」といいがかりをつけられる。みんなが胸をはって復帰をいえる基礎をつくること。ーそれが、「日本国民として」の法文化だった。いったん法文化されれば、教壇に立つ先生は、日本国民としての教育ができ、一般社会人も「日本国民だから復帰したい」とはっきりいえる。

(屋良朝苗回顧録 53ページ)



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/2/21

天皇陛下との絆

屋良朝苗氏は、革新県政のシンボルでもあり、左寄りのリーダーというイメージがあります。しかし、過去の屋良氏の言動をみると、氏は最大の愛国教育者であり政治家ではないかと思えます。

屋良氏は、1972年（昭和47年）5月15日那覇市民会館で開催された沖縄復帰式典の挨拶で次のように述べています。

「私は、いま、沖縄がこれまで歩んできた歴史の一齣一齣をひもとき、殊に終戦以来復帰をひたすらに願い、これが必ず実現することを信じ、そしてそのことを大前提としてその路線に沿う基礎布石、基盤づくりに専念してきた者として県民とともにいい知れぬ感激とひとしおの感慨を覚えるものであります。」

屋良氏の復帰への情熱と異民族支配下でも祖国日本と同じ教育を行うのだという信念なくして、沖縄県祖国復帰は実現することは不可能だったでしょう。

屋良氏は尊皇家でもあり、その後会場で天皇陛下万歳を三唱したことが知られています。

また、今上陛下との深い関係を思わせる秘話を元侍従長の渡邊充氏が1949年（平成24年）9月に日本学協会の定例講演会にて明かしています。最後に一部抜粋してご紹介いたします。

『私が侍従長をやっていた頃に、屋良さんが亡くなられた。そこで、「屋良さんがなくなりました。」と申し上げに参りましたら「じゃあ、葬儀に花を出してくれ」とおっしゃった。「屋良さんについては、県知事経験者ということではお花が出ません」と申し上げた。すると陛下が「それはおかしい」と、このときはやや気色ばんだ感じで「お前のいっていることはおかしい」とおっしゃるわけです。（中略）あれだけ本土復帰のために苦勞をしてきた人であり、ようやく日本に帰って来た最初の県知事ではないかということで、「沖縄県が日本に復帰した最初の県知事というのは他にいないか、他に居ないのだったら、花を出しても何も問題はないではないか」と、こういうことを言われました。』



園遊会で昭和天皇からお言葉を受ける屋良朝苗（昭和47年）



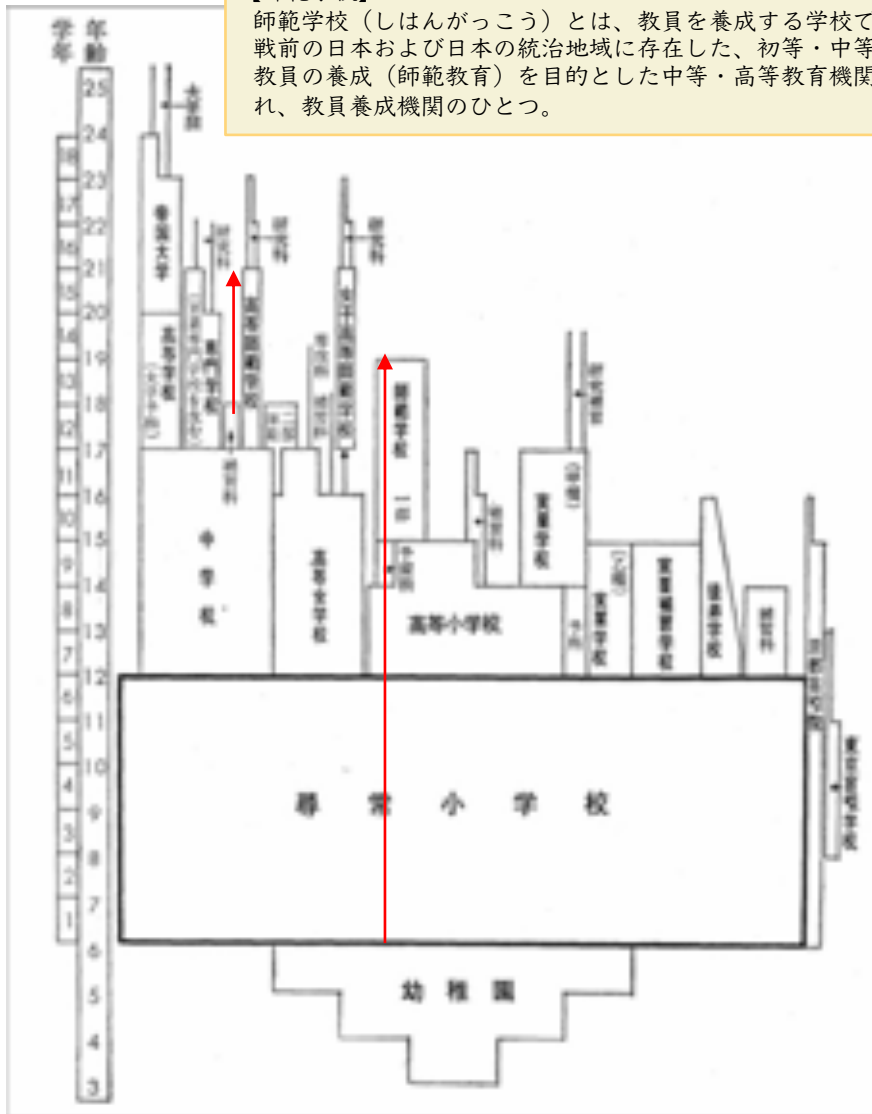
一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

明治41年の学校制度

【師範学校】

師範学校（しはんがっこう）とは、教員を養成する学校であり、戦前の日本および日本の統治地域に存在した、初等・中等学校教員の養成（師範教育）を目的とした中等・高等教育機関とされ、教員養成機関のひとつ。



■小学校(6歳～12歳)

- ・ 嘉手納に、県立第二中学校があり、家から通えるようなところに中学ができたので、子供ながらにも中学に入りたいという熱烈なあこがれをもっていた。
- ・ 朝苗の上級学校への進学を小学校の先生が説得するために家に来たが、父は「今はできない。」と言い張り、諦めるしかなかった。
- ・ 畑仕事をほっぽりだしてただ泣き出すだけの朝苗を見て義姉はかわいそうだと思い、父に学校に入れるように進言した。
- ・ 小学校の先生が家を尋ねてきて、学期途中だが高等科に入学させることができると父に話した。

■高等小学校(12歳～14歳)

- ・ 高等科へ入る時も家庭でやっと許可がでたぐらいだから、上級学校へ進学することは無理だと最初から諦め、これが学校生活最後の場所だと、自分の心を慰めるつもりで時を過ごし、進学する学力をつける気持ちもなかった。
- ・ 卒業の日はいかに言われない寂しさにおそわれた。学校の校門の土手にのぼり、「これで学校とおさらば」と少年の心にもなんともいえない感慨におそわれ、じっといままで学んできた校舎をみつめて別れを惜しんだ。大正5年、高等科を卒業してからは、家にいて農業に従事した。

■農業従事時代(14歳～16歳)

- ・ 仕事が激しいので、もちろん勉強などはできなかった。高等科まで行って、せっかく習った学問もそのままにしていたので、しだいに空っぽになっていく感じがした。
- ・ ある朝、母校、渡慶次小学校の当山先生が父に「朝苗を渡慶次の学校にあずけてくれないか」「使丁（小使）としていれて勉強させたい。農業で埋めさせておくにはもったいない。」と頼み込んできた。
- ・ これを逃せば再び好きな勉強をすることは無いだろう。自分の力をかえりみず、勉強の機会をつかむために渡慶次小学校に使丁として働くことにした。

【高等師範学校】

高等師範学校は明治中期から連合国軍占領期にかけて各地に存在し、官立の高等師範学校として最終的には東京高等師範学校、広島高等師範学校、金沢高等師範学校、岡崎高等師範学校の4校が設けられ（制度上、女子高等師範学校である東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校、広島女子高等師範学校の3校は区別される）、これに準ずる機関として私立の旧制大学に設置された「高等師範部」「高等師範科」がある。第二次世界大戦後の学制改革では新制大学（おおむね教育学部）の母体となった。

少年時代

■使丁時代（16歳～18歳）

- 母と兄は職員室のなかにはいつくるわけにはいかず、庭から窓を通して私の働いているのをみていた。体が小さかったので子供のように見え、母は私がドタバタ机の間を走り回りながら働いているのを見て、思わずこみ上げてくる涙をおさえることができなかったそうだ。
- あれほど上級学校へ進みたがっていた私をそのまま順調に進学させておれば、こうまでして働かさなくてもよかったのにと私が働いているのをまともに見ることが出来ず、顔をおさえたまま、庭の片隅い折れ崩れていたようである。
- 師範学校に通っている校長の子どもたちが、休暇で返ってくると、「とにかく学校の先生になるんだったら、師範学校に入ることだ。いまでも遅くはない。師範へ受験しなさい。検定試験で合格するのはそのような苦勞がある。師範に合格するのが早道だ。」と智慧を授けてくれた。
- 師範受験を決意、小学校5年生ごろかの本からやり直し、8ヶ月の勉強して師範に受験することになった。
- 読谷の村長は「村の発展は教育を盛んにする以外は無い。」という考えを持ち、読谷村出身の師範は月5円を補助することになった。その一回目の師範生として受験した。
- 合格するとは考えていなかったが、比嘉春汀（比嘉春潮の兄）が合格を速報してくれたが、大きな問題にぶつかった。
- 父が大病で危篤状態で生死をさまよっていたため、兄も気を弱くし「もし父が死んだら心細くなるので、君を離農させて勉強させていくわけにはいかない。おそらく、師範にも行けないだろうから、家へ戻って手伝いをしてくれ。すまないが、進学をあきらめてくれ。」と幾度も頼み込んできた。
- それを聞いた父も「それがよかろう。自分はもう治らないから兄を助けてくれ」とぼつりといった。私はどうしていいかわからず、泣き崩れてしまった。
- 憂鬱で苦悩が続いている時、師範からの正式の合格通知が届いた。葉書を持って、家に駆け込んで、病床の父に訴えた。
- 「私としては落第したほうがいいと思いましたが、合格してしまいました。どうしますか？」病床の父の枕元に座って父の顔を覗き込んだが父は無言だった。
- 兄にも知らせようと野良に出ている兄のもとに走った。進学を諦めてくれといった兄だったが、「合格したのなら進学させるしか無いだろう。」と言った。
- 学校にも飛んで行って先生に知らせると、先生方も喜んで家へお祝いに来てくれた。先生方がお祝いに来てくれると、父は「朝苗の合格を聞いて私は病気が治ったような気がする気分が楽になったよ。」と静かにそんな事をいった。

【読谷村の位置】



【読谷村瀬名波の位置】



【渡慶次小学校時代の屋良】



1年の兵役を終えて、広島高等師範に入学するまでの間母校の渡慶次小学校で教壇に立っていました。



師範学校時代

■師範学校時代(18歳～22歳)

- 三学期を迎えた大正十年3月、いまの天皇が皇太子のとき、外遊の途次、沖縄に立ち寄られたことがあった。皇太子を迎える一週間くらい前になると、学校や寄宿舎の大掃除などで忙しかった。皇太子は師範学校の附属校庭で空手や女子師範生のダンスをご覧になることになっていた。
- それで、毎日女子師範生がやってきてダンスのけいこをしていたが、その頃、男子の学校に女性とがやってくるのは珍しく、師範生は大喜びであった。しかし、実際に皇太子がおいでになったときにはスケジュールの関係で、空手やダンスはご覧になれなかった。皇太子は中城湾から軽便鉄道で那覇にこられ、県庁から人力車で首里に向かわれた。皇太子は二十歳のころでお若く気品があった。私達は尚家近くでお迎えした。
- 舎監をしていた池城先生は、難しい宿題をよくだし、部屋に回ってきては「どうだ、できたか」と聞いていたし、私も数学の回答を見せるのが何よりの楽しみだった。こんな関係で特別親しい師弟関係にあった。数学の件でいなかからきた私でも勉強すれば人にも負けずにやって行けるんだと自信を持つようになった。数学の力がつければ、他の学科の勉強もしやすくなった。
- こんな関係からはじめは師範だけをでれば良いと思っていたが、次第に自信を持ち、師範二年生から高等師範進学目標を立てていた。
- (試験当日) 自分が一番力をいれていた数学に第一日目に失敗。試験は三日間あったが、初日の失敗に失意、二日目は棄権するつもりでねていた。床の中にいると同期生の知念清一君が訪れてきて、「そんな女々しいことでどうするか。試験は受けなければいけないのだ。」と引っ張り出されて試験場につれていかれた。
- この日も予想よりはよくできなかった。発表の日は駄目だろうとおもいながら、12時頃までまっていたが、何の知らせもなかったが、翌日一日遅れて、合格(広島高等師範学校理科二部)の電報を受け取った。
- 高師への入学試験の目的は達成したが、私はまだ家の人の了解を得ておらず、家の人をせつとくしなければならぬという大きな問題をかかえていた。
- まずはじめに読谷の役所にいき、「学資困難のため村で考えてもらいたい。」ということをはのめかした。
- 次は渡慶次小学校に行き、先生方に両親の説得をお願いしておいた。
- 「学資のあても無いのに上級学校へ行くと」畑仕事にでている父にもしらせだが、父も心配していた。子供が上級学校にはいったのだから喜ぶのは当然だが、喜んだところで、なにしろ先立つものが無い。兄もただだまっているだけである。
- そこへ先生がた押しかけてきて、ロ々に「おめでとう」といったので、家の人も学資はなんとか方法を講じてやろうということになっていた。私はすぐ首里にかえった。あまり家に長くいるといつなんどき進学に反対されるかもしれないからであった。

- 読谷で高等師範学校にパスしたのは私が初めてだっただけに、村でも学資金を助けてやろうと村の有志がかけずりまわり、当時としてはそうとうな金を募金してくれた。
- 学資問題も十分解決しないうちに、また大きな問題がひとつもちあがってきた。師範学校を卒業すると、すぐ一年現兵役として入営しなければならなかった。私は徴兵検査に合格していたので、難問であった。
- 私は高等師範学校を卒業してから改めて兵役にいくつもりで司令部にいくものすごいけんまくではねつけられてしまった。もう絶体絶命だ。
- 最後のたのみとして、高等師範学校に1年入学延期できないかと電報を打ったら、手続きさえすれば入学延期はできるという返事がきた。それで一年現役兵として行き、延期して入学することにした。

沖縄師範学校4年制(大正13年秋)



左：郷里読谷村出身の男女学生の集い。向って前列左端が妻(ヨシ)
下：師範学校時代の屋良朝苗



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/2/21



沖縄師範学校卒業記念（大正14年）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村覚
2019/2/21

広島高等師範学校を卒業して中学校教員へ

■短期現役兵時代（23歳）

- れわれの入学したころは大正末期で軍備縮小時代であり、連隊の廃止が多く、都城も廃止になり熊本から移動してきた連隊といっしょに編成された。シベリア出兵からの帰還があったりして軍隊内はゴタゴタ。正規の訓練もほとんど受けなかった。
- とにかく退営を望んでいた矢先、五ヶ月で帰休満期、退営して沖縄に返った。高等師範学校の入学まで4ヶ月あるので、それまで渡慶次小学校で教鞭をとった。
- 大正15年4月に広島高師から連絡を受け入学することになった。心配していた学資の問題も目鼻がついた。読谷の村で私に対する貸貸制度を特別につくってくれ、一ヶ月300円、4カ年貸与してくれた。

■高等師範学校時代（24歳～28歳）

- 高師入学と同時に寄宿舎にはいった。高師の寄宿舎は運動別にわけられていて、私は柔道部にはいった。
- 柔道部は部員が親しく結束し、夏休みには松山、徳山などに合宿訓練、そのほか年中、放課後は練習をつづけていた。柔道は肉体的にも精神的にも学科に劣らないくらい収穫があった。
- 広島高師は好きな学科の勉強なので特に困ることはなく、平凡に四カ年過ごし無事卒業した。
- 広島には文理大ができていたのでできるならそのまま進みたかったが家庭の都合で進学は思いとどまった。最初は沖縄に帰るつもりはなく、関東方面へ就職することになっていた。
- しかし、私たちといっしょだった本土出身のある人が、沖縄の一女（沖縄県立第一高等女学校）に就職が決まってしまったというので、非常に悲観していた。「沖縄に行くのはいやだ」ということであった。
- いやいやながら沖縄に行ってしまうとは、沖縄教育会のマイナスであると私は考え、すぐさまこの人とかわることにして主監のところへ交渉にいき、沖縄へ帰ることを決意した。

■沖縄県立第一高等女学校勤務時代（28歳～33歳）

- 昭和5年3月、沖縄県一女に赴任した。私の担当する学科は物理で、四年の主任になり初めて中等教育会に踏み出した。
- そのころ一女の生徒は優秀な生徒が多く、しかも女性とだけに素直であった。
- ただ、私の担当している学科が物理なので、女の生徒にはそれほど興味がなかったせいか、質問が活発でなかったのは物足りなかった。いまから考えると物理教育の知識面だけを考え、物理教育の本当の努力が足りなかったためではないかと思う。

■沖縄第二中学校勤務時代（33歳～36歳）

- 昭和10年第二中学校へ転任した。校長は志喜屋孝信で最後の校長の年だった。
- 二中に行って真っ先に感じたことは先生方の陣容が揃い生徒の質が良かったことである。
- その頃二中では物理の生徒実験はやっていなかと思うくらい不備であった。備品費もわずかでなにも買って揃えるわけにはいかなかった。
- そこで、工作器具を買うことを思いつき、物理の生徒実験器具を自分の手で作ることを計画した。満足できるようなものではなかったが、全部手製で作り上げ、実験をやった。
- 昭和10年に二中は創立25周年を迎え秋には記念行事を予定していた。各学科とも大々的な展覧会を催すことになった。
- 私は科学の展示会を受け持ったが、ただ器具を展示して実験することだけでは魅力も無いので、展示する器具も創意工夫のあるものを展示しようと自分の手で行うことにした。
- 展示は3教室分を予定し、生徒の実験用器具、展示会出品器具の製作に忙しく、毎晩夜の10時から11時まで学校に残って製作し、時には明け方5時ごろまでつづいたこともあった。
- その頃教えた生徒の中には瀬長浩（前副主席）、西銘順治（那覇市長）、古波倉正照（医博）、長田紀春（医博）など優秀な生徒がいた。



宮崎県都城歩兵第23連隊短期現役兵で入隊（大正14年）



広島高等師範学校卒業記念（昭和5年）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/2/21

■台南二中時代（36歳～40歳）

- 当時、沖縄ばかりにいたるとなにかしら将来の希望が持てないような気がした。このさい、植民地に発展していったほういいのではないかと思った。そんな矢先、台湾の台南第二中から口がかかってきた。当時の二中の校長の山城篤男先生に懇願して台湾に行くことをきめた。昭和13年3月末、台南州立第二中学校へ赴任した。
- 台南二中は台湾出身者の学校としての特色を非常によく表し、生徒の将来の希望はほとんど技術的なもので、なかでも医者志望が特に多かった。かられの希望はほとんど台北医専である。
- 台北医専は台湾出身者にとってはものすごく入学難で可否を決定するのは物理、化学であった。
- この目的を果すためには科学的雰囲気の中で指導し生活させることだと私は考えた。そのためにはただ彼らの受験指導ばかりでなく、生徒実験を徹底すること、その上、理化学器具の製作指導というのに非常に力を注いだ。
- 理科部というのを設け放課後徹底的に製作指導をした。希望者は殺到して300人ぐらいいも集まり、うれしい悲鳴をあげたものである。
- こうして製作した器具は、毎年1回理科展覧会として一般に公開。これは台南二中の名物となり校長はいつも誇りにしていた。
- やがてこの展覧会は知事の目にとり、台南二中の理科部は知事から表彰され、生徒も喜び、ますます自信を得て、勉学、製作に励むようになった。
- この展覧会に刺激され、こんどは台南州全体の学校関係の総作品展覧会を開くことになり、台南に中の25点を出品した。全部で50点の入賞作品だったが、台南二中の25点はぜんぶ入賞という結果になった。
- 総督府から命令されて私は台南二中から師範学校に変わるようになった。私が転任ということになると上級学校を志願する生徒たちががっかりしていた。
- 出発の日には全校生徒が台南駅に見送り、すべるように走っていく記者をホームでおっかけて列れを惜しむという感動的な場面もあり、純粋な生徒の気持ちにうたれ、家内と二人思わず目頭をおさえたものであった。

■台北師範学校時代（41歳～45歳）

- 昭和18年の新学期を迎えた時、新制師範として発足した台北師範学校に赴任していた。いきなり本科の最上級の学級主任としての立場におかれた。
- その他、台湾全全体の中学校、女学校の物理化学の指導委員を任命され、在職中台湾全島を指導にまわるようになっていた。
- 次第に戦争も苛烈をきわめ、負け戦が目に見え始めていた。
- 貧弱な食料生活のなかでも学校をあげての増産作業、軍の作業に対する協力動員、防空壕を掘る荒仕事もつづいて勉強はできない状態であった。
- ついには台北師範も学校を全部閉鎖、軍隊に切り替えられ、生徒も先生も校長以外は応召され、それからはたちまち軍隊の生活に変わってしまった。

- 学校は閉鎖となり、私たちは転々と移動してロンピアーという山の中の高砂部落に移動して、敵の上陸にそなえる生活が始まった。
- この山の中にいるとき、「沖縄は全員玉砕」の報告を聞き、いいしれぬ悲しさ、さびしさにうちのめされた。間もなく終戦、除隊して師範に戻ってきた。
- 終戦後の師範学校は大混乱し、学校の秩序も全く乱れて従来の教師としての心構えなどは、全く地に落ちた感じであった。
- 台湾出身の教官が自称代理校長として校長室を選挙し、勝手に先生方を召集し一人ひとりに難癖をつけ、恐喝する状態も続いた。
- 生徒は生徒連盟をつくり、その委員が台湾の生徒を差別的に取り扱った先生や生徒を呼び出して、詰問し、吊し上げ、時によっては殴る、蹴る、もうみでは折れない状態だった。
- ある先生のごときは土下座させられ、生徒の鉄拳を四方八方から受けて前歯もおられる悲惨なものがあつた。
- あるときは、生徒が父兄同伴で呼び出され、群衆の怒りがこの親子に乱れ飛び、親子ともに声をあげて泣き、ひたすら土下座してお詫びしていた。
- 不思議に沖縄出身の人はずぐられなかった。あとで聞くと、中国と沖縄は縁が深いからというもので苦笑したことがある。そのうち、中国から校長をはじめ教員が乗り込んできた。
- 接收されてからの師範は、まず国漢、歴史、地理の先生はみんな追われ、毎日の生活に窮し、その先生方は味噌売りとか、野菜売りをして生活をつないでいた。
- 私は物理の先生だったので、専門の教師が中国からきておらず、引き続き学校で、二、三人の日本人の教師といっしょに勤務、生活は保証されていたが、もう教育上の責任はなにひとつなく、形ばかりの教師で、ぜんぜんやり甲斐は感じられなかった。
- 希望の無い日を一年ばかり続けている間に沖縄にも帰れる日がきて、昭和21年の暮、変わり果てた沖縄に引き上げてきた。



25 県立第二中学校教諭の頃創立
周年記念展覧会（昭和10年）



（在台湾の頃の家族
（昭和16年正月）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/2/21



屋良朝苗沖縄県立一高女4年乙組学級主任当時（昭和7年）



屋良朝苗沖縄県立女子師範学校生徒と昼食（昭和9年）



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan



屋良朝苗沖縄県立一高女4年授業風景（昭和10年）



屋良朝苗沖縄県立女子師範学校生徒卓球部と（昭和9年）

敗戦直後の混乱時代

■知念校長時代(45歳～48歳)

- 私は台湾からの沖縄への引き上げ船のほとんど最後の船に乗り、引率者となって沖縄に返ってきた。久場崎の収容所に収容させられ、一泊したあと、石川に引き取とられていった。石川には私の兄や母がいたからである。石川までの途中、あまりにも変わり果てた郷土の山河、住宅をみたときに、ほんとに戦争とはこんなものかと嘆かわしく思ったものである。
- 私の四男が当時小学校の五年だった。石川の城前小学校に入学させるため連れていったところ、台湾の豪華な校舎をみてきた子供は城前のテント張りの校舎は学校ではないと行って、どうしても学校にはいかないと手こずらせたこともあった。泣くに泣けない気持ちで、いまでも忘れることの出来ない場面である。
- 結局、田井等高等学校（現在の名護高校）に採用してもらうことになり赴任していったが、一ヶ月くらいで知念高校に転任してしまった。
- 知念高校長として転任したのは昭和二十二年4月初旬であった。私の胸を強く打ったことは、生徒が教科書もノートも持っていないことである。一度書いた紙をノートがわりに使っているみじめな姿を見て、これでは果たして高校の教育がなりたつものであるかと思ったのだ。服装は男女生徒とも軍服の改良服で、女生徒などは履物も下駄履きだった。雨の日などは下駄をさげて裸足で登校する姿をみたとき、本当に気の毒であった。
- 更にこの生徒たちが卒業してからの進学のメドがつかず何の希望も与えられずに、ただ励ますだけで、混濁の社会に送り出す時の気持ちは、なんともいえず、さびしくもあり悲しく思った。若い学徒の進学の道がひらけずに、文化国家の建設もありうるはずはなかった。もあった。
- 知念高校は校舎はあるが、内容設備は何もない。そこで、私が学校経営にとくに力をいれたのは、総意と工夫をこらして自力で学校設備を整えていくという、創造的、発展的学校経営を推し進めていくということであった。
- 知念高校では化学の創作活動が活発に行われた。そこで、台南二中の経験を活かし、ここでも毎年定期的に創作品展覧会をやった。
- 生徒の作る作品の優秀さには、私もほとほと舌をいたものである。実験器具のほとんどを作り上げ、戦車に使われている有機ガラスをもってきて、光学の実験にこと書かない凸レンズ、凹レンズ、あるいはプリズムを作って私を感激させた。
- 1949年7月に来襲したグロリア台風で講堂をはじめトタンぶき校舎は吹き飛ばされ、授業にも事欠く状態であった。ちょうど、その時、佐敷の高台にあった民政府のトタンぶき建物も全部ぶきとばされ、民政府はやむなく那覇に移ってしまった。
- 民政府工務部長の松岡さんを訪れ、特別にお願いして民政府のこわれた建物を知念高校が貰い受けることにした。交渉が成り立つと早速、生徒800人を使って建物を分解し、一挙に運び込んだ。
- 生徒たちは手に手にハンマーや金具をもって行動の屋根にあがり、当時としては良い校舎ができた。

- 木材資材もそうとう手にいれたので、これを利用して学校の机、腰掛けその他木工器具の製作に当たる計画を立てた。女生徒は木材の釘抜きにあたり、理科部の生徒は素晴らしい製材機（回転ノコ）を組み立て、木材の製材をした。
- 机、腰掛けのモデルは私が作り、そしてすべての生徒にこのモデルを示し、一週間にわたって製造にあたった。これを指導し督励する総監督は私であった。
- 全部の机、腰掛けが出来上がったときには、運動場に机、腰掛けをならべ、全校生徒がこれにすわって記念撮影をした。ずらりと並べられた机、腰掛けに生徒たちも大喜びだった。
- 知念高校は水が不便である。その水は朝登校して生徒が当番制で運んでいたものだ。知念高校は山の頂上にあつて、どこからも坂道を歩いてこなければならなかった。試験の時などは気の毒で見てはおれない。勉強にも支障が来るであろう。なんとかこの労役から生徒を救う道はないものかと考えてみたが、当時としては経費もないし、いい方法は見つからない。ただ一つ可能な道は、永久的ではなかったが、私が自分で夜分に水を運ぶことだった。そうしようと思い、夜遅くから水を運んでトラム缶二つに満たしておいた。
- ある番、水くみの正体をみきわめようとバレエ部の選手、新垣悠久君たちが見張りをしているのにひっかかってしまった。彼らは「先生、僕らが運びます」といって、もう私のこのような行動を許さない。
- 昭和25年3月、軍の方針によって祖国の教育指導者の講習（アイフェル講習）に派遣されることになり、軍用機で出発した。講習は三ヶ月、実際にいって新しい教育の実情をみてびっくりした。沖縄では図書を売る店さえ無く参考書さえ見たことがなかったが、福岡の町には参考書が満ち溢れていた。
- 隠岐の島に台南でつかえた校長をたずねていき、その中学校で鉄筋コンクリート三階建ての素晴らしい校舎ができてつつあるのを見たときは慨嘆したものである。



台風に破壊された 民政府本館

川平朝申氏資料／写真保存箱
191(封筒番号026)／グロリア
台風により琉球列島内では大きな被害を受けた。この台風により軍政府では沖縄の建築様式を規格住宅の様なものではなく、恒久的なものにしなければならぬと考えられるようになった。



一般社団法人

日本沖縄政策研究フォーラム
Okinawa Policy Research Forum of Japan

仲村 寛
2019/2/21